



Title	植民地旅行記における空間の感情的性格：アフェクト理論に基づく『支那遊記』における諸空間の考察
Author(s)	温，馨
Citation	グローバル人文学研究交流会要旨集．2025，1，p. 16-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100474
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

植民地旅行記における空間の感情的性格

ーアフェクト理論に基づく『支那遊記』における諸空間の考察ー

温馨 (言語文化学・M1)

1. はじめに

旅行記という文学ジャンルそのものが自明の概念ではないということと指摘された(杉本, 1998). Sangsue は旅を伝統的な旅(*le voyage traditionnel*)とユモリスティックな旅(*le voyage humoristique*)に分類した(Sangsue, 2002). が、『支那遊記』が大阪毎日新聞に掲載された歴史的時期に属した旅行記の出版動向を考察した結果、定型化した周遊ルートのおかげで表面的かつ定型的な植民地理解を形成する機会を作り出すものであったと言われている(米家, 2014). そこで、純粋な知るための旅と感情的で偶然の旅という分類は相対的であり、合流していた傾向を示した上、植民地時代の旅行記または植民地旅行記というサブジャンルが出てくる可能性がある。

一方で前田は、日本の近代作家にとって追憶につながる「原風景」や「自己形成空間」の両方が重要な意味をもっていると示した(前田, 1989). 即ち、近代の旅を書いた作家たちは広大無辺な風景の展示場所から界・形のある都市空間に視線が移る際に、書かれた空間の表象が複雑化になり、物理的空間と心的空間のどちらかのみに依拠した空間論が不十分になると指摘された(菅野, 2011).

それに影響を受けた旅行記の近代化といった想定のもとに、さらに旅行記研究の新たな視点やアプローチが求められる。そこで、人間(作者)が身を置く空間を主題として執筆する活動は「空間の表象」(*les représentations de l'espace*)を意識的に抽出することになる。それに対して「表象の空間」(*les espaces de représentation*)は「生きられたもの」であり、「反省・思考実践への契機」の構想力」としてと定義づけられた(福田, 2001). そのため、作者がそのような空間の一部とする「自己」に対する文学的加工を行い、「表象の空間」はそのプロセスの中に生成される。

文学研究の視点と絡みながら「情動」や「感情」の研究の系譜を引くと、注目すべきのは、身体が頻繁に登場し、抽象な感情の所在という問題設定に分析が可能な次元を提供できる¹(Nelson, 2024). この研究は身体の変動とつながりて成立する旅行と旅行記の執筆を、言い換えれば「個人の経験」から「個人の語り」までの生成の過程をテキスト読解のもとに還元する。

2. 研究の視座と問題設定

『支那遊記』²に関する先行研究の全体像を俯瞰すると、「支那趣味」というキーワードは日本の近代化や帝国主義的な国民意識から派生したもので、イデオロギー的な民族差別論の批判や「他者」論に基づく日中対照説の研究パターンに誘導していく。一方、『支那遊記』に言及する日本の研究者は旅行前後に起こった、芥川の対中国関心に伴う文学的変貌に注目し、日本作家である芥川の心理上の私的領域に焦点を絞っている。「作者のまなざし」を絶対的な中心として論証した前述の研究方向は単一化してきた³。また旅行記は空間の体験を主題としているにもかかわらず、従来の研究では「空間」の問題はおおむねされてきた。

したがって、本研究における感情と情動研究の視座は作者の「個人」の次元を超えて、文学と文化研究の議論が交わされた研究を積極的に取り扱うことである。そして、テキスト内の空間を軸とする空間研究の視座は、空間内で相互作用を関与した「人間」と作者の意識を織りなす「表象の空間」が現れる「空間の表象」を扱うことで、言い換えれば、「空間」

¹ Spinoza の著書 *Tractatus de Intellectus Emendatione* の英語版(Nelson, 2024)を参照。

² テキスト研究は『芥川龍之介全集』の以下の巻を参照。

芥川龍之介(1978). 「北京日記抄・雑信一束」『芥川龍之介全集・第七巻』「北京日記抄・五 名勝」『芥川龍之介全集・第七巻』「上海遊記・十 戯台(下)」『芥川龍之介全集・第五巻』岩波書店。

³ 「先行研究」における「研究パターン」と「作者のまなざし」の議論についての見解は、単(2019)及び小澤(2009)を参照。

および空間の特性に関する帰納から分類へ進むのである。

3. 目的

シルヴァン・トムキンズやジル・ドゥルーズ、ブライアン・マッスミラが先導したアフェクト研究の勃興を受けて、身体を中心としたアフェクト(情動)の現れやその変化は文学研究においても注目されつつあると指摘された(竹内・高橋, 2016)。研究は『支那遊記』を中心に、文学研究で背景化された「空間」と「感情」を二つの研究対象とし、旅行記研究の新たな経路を切り開くことである。研究はまた、次の問いに答えることを目的としている。即ち、地理的空間や、言語の枠を超えた接触の中で、作中の「空間」の形成がどのように「中国幻滅」といった特定の話題や当時の日中関係を取り巻く政治経済的な構図、精神的な座標の喪失などの多様な要素を包含するのかという問題である。さらに「自己」を形成する過程には、情動研究の試みにおいて「虚構」・「逸脱」など行為を通じて「感情的自治」という状態を到達することがあると言われている(劉, 2022)。

研究は旅行記作品において、芥川が出会いにより形成している「自己」は逸脱行為として位置づけられる旅行の実践を通して、旅行の当時の中国といった空間に対して幻滅を痛感しながら虚構を行い、どのように感情的自治を構築する由緒を探索したい。

4. 研究の方法

- 4.1 テキストの精読と作品の時代背景に関する社会学的研究の両立
- 4.2 「空間の表象」という要素に基づき、テキスト内の典型的な空間の特徴を抽出・整理する
- 4.3 旅行記研究の方法論について、複数のテキスト対象間と先行研究対象間の比較対照
- 4.4 感情・情動研究と空間研究の両方を文化研究の次元に導入し、「新しい主体」の生成経路を解明する

5. 考察および結果

5.1 旅行記と個人の語り：『支那遊記』テキスト分析

5.1.1 「歴史的空間」や「叙述的空間」の傍にある「第三の空間」を導入することで、従来の芥川作品研究で少ない作者の視界の近傍に入る。作者が旅行経験から得られた記憶と情緒の絡み合いを直接に把握しがたいことと認識した。

5.1.2 歴史的かつ虚構的な旅行記作品におけるフィクション問題の位相を明らかにするように、時間の流れ、または事件の連続に満ちた旅という一般的な考え方を飛び越え、旅行を一つ一つの空間の連続と見なしながら、作中の叙述法や表現法を整理する。

5.2 感情と情動：知識経験から生成経験まで

Tuanは特定の空間における分業や価値観の存在およびその意味は、身体に依存していると指摘している(Tuan, 1977)。発表は作者が新聞記者、旅行者、文人、漢学通などの身分を遍歴した過程で、「出張先」や「見知らぬ異国」、「馴染んでいく中国」に対して絶え間なく複雑な感情は上記の様々な「身分」の対応を分析する。ここで、人間関係の変化による身分の転換によって既有的な権力関係から逸脱するように、また新たな権力関係を形成することを繰り返している「新しい主体」の再構築について、芥川の「観劇」と「中国知識人との出会い」を例として、解明を試みた。それでも、情動と文学の生成と交差する視点から切り拓く。

5.3 近代的空間の諸象：近代化された空間における「人」の存在

竜は空間叙事学の観点から、「現実的空間」と「虚構的空間」の谷間にある非小説のテキスト(伝記や歴史的叙述などで登場した空間に関する考察が少なかったと指摘した(竜, 2015)。この部分はルフェーブルの空間論と竜の空間観に基づき、『支那遊記』における近代的空間の特徴を整理した(ルフェーブル, 2000)。現時点では、以下のような解釈を行った。

- 5.3.1 現実空間→形態や機能を有する空間
- 5.3.2 虚構空間→知と文化的生産が展開される空間
- 5.3.3 第三空間→テキスト内外を締めくくる近代化の諸要素に遭遇した「表象の空間」

上記のように細分化されて扱う予定である。
また、上記の分類法は個別の空間例の分析に積極的に導入されることを想定している。例えば、
現実空間→観客席を代表とした機能を有する空間
虚構空間→舞台を代表とした文化的生産が展開される空間
第三空間→近代化的矛盾が現れる「空間の表象」

6. 研究の展望

「空間—情動」という分析アプローチで、感情の社会性による新しい文学的主体(「私」という一人称を使う個人的語り)を想定しうる旅行記研究は今後の課題としたい。研究はテキストにおいて、作者が元の感情から逸脱行為の主体性を明確にする上、作中空間において「私」の視点の移動が情動の方向を指示することを探究する。ポストモダンやポストコロニアリズムの射程にとらえ、社会学や文化理論など領域で空間と感情の相互作用によって、無視されがちな「情動の新しい主体」の発見を進める可能性を検討する。

参考文献

- 福田光弘 (2001). 「H. ルフェーヴルの「空間の生産」概念について—representation の空間的発現の両義性への考察」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学・心理学・教育学 = 人間と社会の探究』52, 27-37.
- 米家泰作 (2014). 「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究：鮮満旅行記にみるツーリズム空間」『京都大学文学部研究紀要』53, 319-364.
- 小澤保博 (2009). 「芥川龍之介『支那遊記』研究(上)」『琉球大学教育学部紀要』75, 35~47.
- 劉璇 (2022). 「『物感』与『情動』情感の两种发明及其中西演绎」『中国文学批评』2, 121-129.
- 竜迪勇 (2015). 空間叙述学：A study of spatial narrative. 三聯書店.
- 前田愛 (1982). 『都市空間のなかの文学』筑摩書房.
- Nelson, A. (2024). *Treatise on the Emendation of the Intellect*. In: Hübner K, Steinberg J, eds. *The Cambridge Spinoza Lexicon*. Cambridge University Press.
- ルフェーヴル, アンリ. (著)ほか(2000). 『空間の生産』青木書店.
- Sangsue, D. (2001). *Le récit de voyage humoristique* (XVIIe -XIXe siècles). *Revue d'histoire littéraire de la France*, 101(4), 1139-1162.
- 単援朝 (2019). 「芥川龍之介と中国における西洋・日本：中国各地の租界での体験を視座に」『跨境：日本語文学研究』8, 39-53.
- 菅野拓(旧姓 中村) (2011). 「都市空間をいかに記述するか：「見る者」か「遊歩者」か、それとも?」『都市文化研究』13, 57-68.
- 杉本圭子 (1998). 「旅行記というジャンルースタンドール『ある旅行者の手記』をめぐって」『仏語仏文学研究』17, 41-67.
- 竹内勝徳・高橋勤(編) (2016). 『身体と情動—アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』彩流社.
- Tuan, Yi-Fu. (1977). *Space and place*. University of Minnesota Press, 1977.